

IV 鶏卵

(1) 消費

消費量は、概ね安定的に推移してきたが、平成29年度から令和元年度にかけて増加傾向で推移した。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により家計消費は増加したものの、業務用需要が減少したこと等から、前年度を下回り、令和3年度は業務用需要は回復傾向にあるものの、267万トンと前年度比0.4%減少した。

(2) 生産

生産量は、27年度以降、家庭用、業務・加工用ともに需要が旺盛であったこと等から、前年度を上回って推移した。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により価格が低下したことや令和2年度シーズンの鳥インフルエンザの大規模発生による影響から、前年度を1.8%下回り、令和3年度は258万トンと前年度比0.8%減少した。

(3) 輸入

輸入量は、国内消費量の4%程度で推移。輸入量全体のうち約9割は加工原料用の粉卵が占めており、主に、オランダ、イタリア及び米国から輸入している。

平成29年度以降、年間約11万トンで推移したが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響による需要の減少等により、前年度を下回った。令和3年度は、鳥インフルエンザの影響で生産量が減少し価格が高騰したため、加工用の国産鶏卵の代替として輸入されたこと等から、前年度比12.7%増の11万5千トンとなった。

○ 鶏卵需給の推移

(単位:千トン、[トン]、%)

年度	平成23	24	25	26	27	28	29	30	令和元	2	3
消費量	2,633 (0.5)	2,624 (▲0.3)	2,642 (0.7)	2,628 (▲0.5)	2,654 (1.0)	2,649 (▲0.2)	2,710 (2.3)	2,737 (1.0)	2,753 (0.6)	2,684 (▲2.5)	2,673 (▲0.4)
生産量	2,495 (▲0.4)	2,502 (0.3)	2,519 (0.7)	2,501 (▲0.7)	2,544 (1.7)	2,558 (0.6)	2,614 (2.2)	2,630 (0.6)	2,650 (0.8)	2,602 (▲1.8)	2,582 (▲0.8)
輸入量	138 (21.1)	123 (▲10.9)	124 (0.8)	129 (4.0)	114 (▲11.6)	95 (▲16.7)	114 (20.0)	114 (0.0)	113 (▲0.9)	102 (▲9.7)	115 (12.7)
輸出量	[459] (▲41.8)	[722] (57.3)	[1,266] (75.3)	[1,888] (49.1)	[3,069] (62.6)	[3,521] (14.7)	[4,635] (31.6)	[6,881] (48.5)	[10,271] (49.3)	[19,895] (93.7)	[24,353] (22.4)

資料:農林水産省「鶏卵流通統計調査」、財務省「貿易統計」

注1:()内は対前年度増減率。

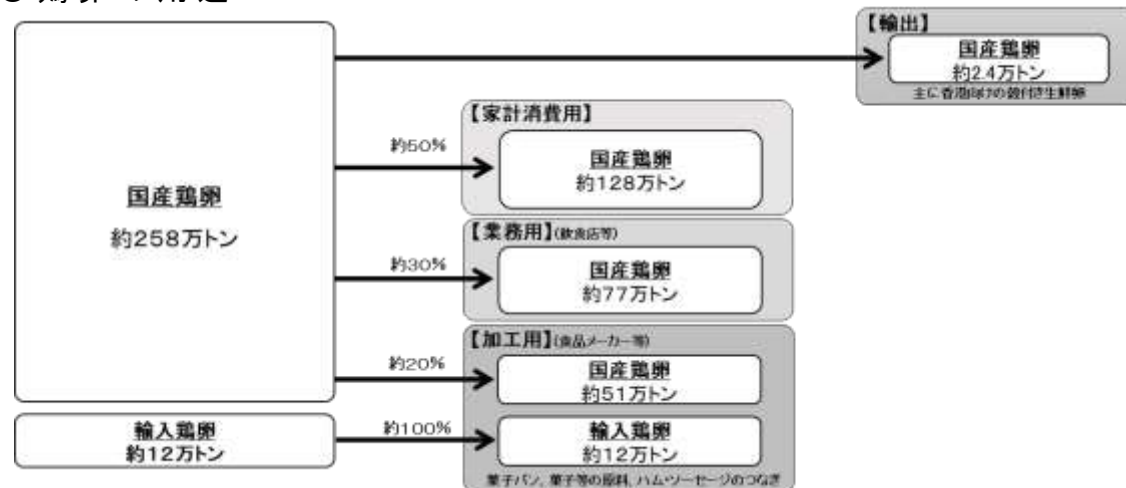
2:輸入量及び輸出量は殻付き換算。

3:輸出量の[]内は、トン表示。

4:令和3年度は概算値。

5:消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」により推計。

○ 鶏卵の用途



資料:農林水産省「鶏卵流通統計調査」、財務省「貿易統計」、食肉鶏卵課調べ

(4) 卸売価格

卸売価格は、夏場の低需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。

近年の生産拡大に伴う需給緩和により、平成31年の年明けに価格が下落し、令和元年度に入っても低迷が続いたが、台風15号・19号の被害による供給量の減少と年末需要期が重なったことを背景に、年末にはほぼ平年並みの価格まで回復した。

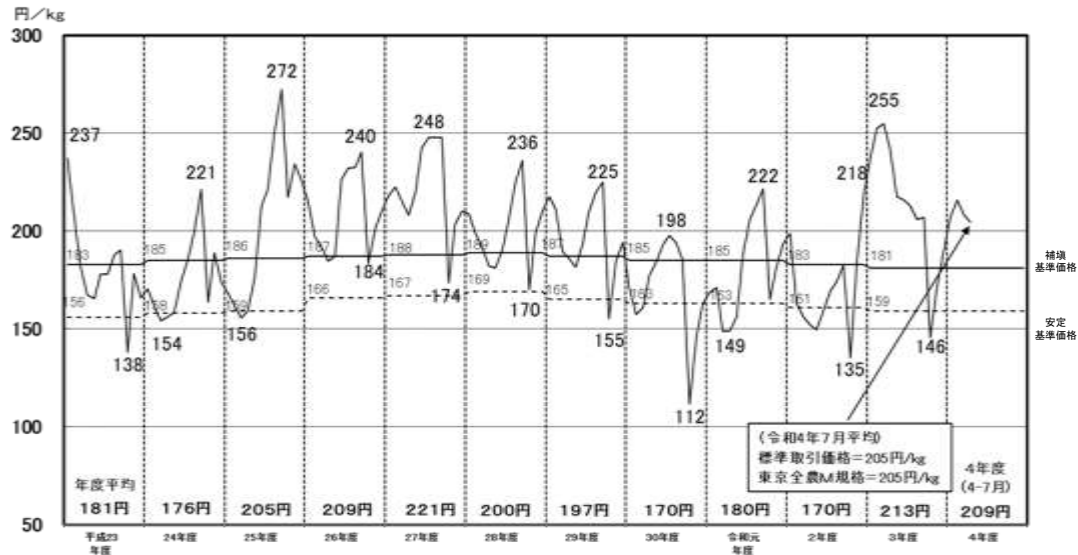
令和2年度は、4月の緊急事態宣言後、業務用の需要が大幅に減少したため、価格は低水準で推移した。

令和3年2月中旬以降は、令和2年度シーズンの鳥インフルエンザ発生により殺処分羽数が多かったこと(採卵鶏約900万羽(全国の採卵鶏飼養羽数の約5%))等により、例年を上回って推移した。

令和3年度は、春から夏にかけて高値で推移したが、生産回復等により11月以降は例年をやや下回る水準で推移した。

令和4年5月以降、業務用需要が回復傾向にあること等により、価格は例年を上回る水準で推移している。

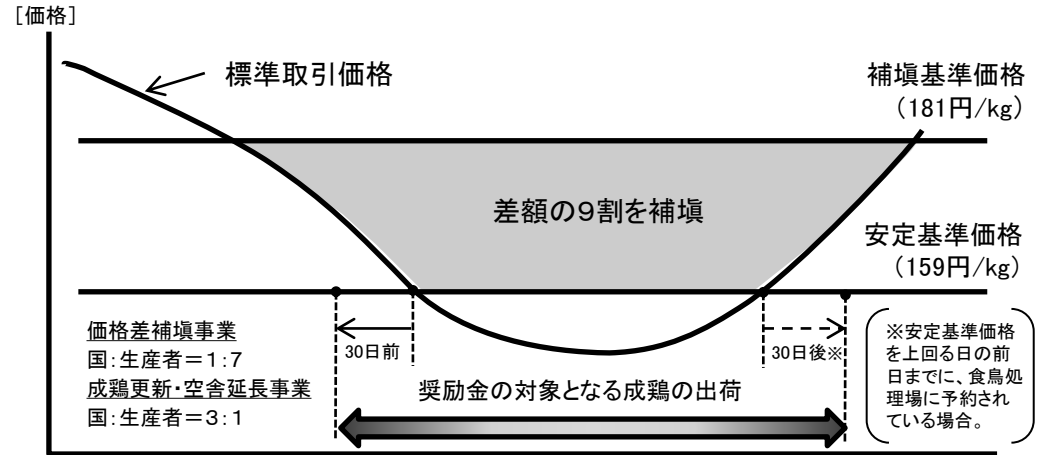
○ 鶏卵卸売価格(標準取引価格)の推移



資料: JA全農調べ

注: 標準取引価格は、東京・大阪の規格卵の加重平均である。

○ 鶏卵生産者経営安定対策事業の概要(令和4年度) (鶏卵価格差補填事業及び成鶏更新・空舎延長事業)



※成鶏更新・空舎延長事業

毎日の標準取引価格が安定基準価格を下回った場合、成鶏を出荷後、60日以上鶏舎を空ける取組を支援する事業。

(5) 飼養動向

- ① 飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和4年は1,810戸（前年比▲3.7%減）となった。
- ② 一方、成鶏めす飼養羽数は、26年以降は鶏卵価格が堅調なこともあり増羽していたが、令和2年度シーズンの鳥インフルエンザの影響等により令和4年は約1億4千万羽（前年比▲2.4%減）となった。
- ③ 成鶏めす飼養羽数10万羽以上層は、飼養戸数の割合で全体の20.5%であるが、成鶏めす羽数の割合で全体の79.4%を占める構造となっており、経営の大規模化が進んでいる。平均飼養羽数は、令和4年は75.9千羽/戸（前年比1.5%増）となった。

○採卵鶏飼養戸数、羽数の推移

(各年2月1日現在)

区 分 / 年	平成23	24	25	26	28	29	30	31	令和3	4
飼養戸数(戸)	2,930	2,810	2,650	2,560	2,440	2,350	2,200	2,120	1,880	1,810
(対前年増減率)	(▲5.8)	(▲4.1)	(▲5.7)	(▲3.4)	(▲4.7)	(▲3.7)	(▲6.4)	(▲3.6)	(▲11.3)	(▲3.7)
うち成鶏めす10万羽以上層(戸)	336	327	328	324	347	340	332	329	334	334
シェア(%)	(12.5)	(12.8)	(13.5)	(14.0)	(15.7)	(16.1)	(16.7)	(17.1)	(19.6)	(20.5)
うち10万羽以上～50万羽未満層(戸)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	279
シェア(%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(17.1)
うち成鶏めす50万羽以上層(戸)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	55
シェア(%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3.4)
成鶏めす羽数(千羽)	137,352	135,477	133,085	133,506	134,569	136,101	139,036	141,792	140,697	137,291
(対前年増減率)	(▲1.8)	(▲1.4)	(▲1.8)	(0.3)	(0.8)	(1.1)	(2.2)	(2.0)	(▲0.8)	(▲2.4)
うち10万羽以上層(千羽)	90,083	90,314	91,556	93,476	99,395	101,048	104,515	107,734	112,535	109,002
シェア(%)	(65.7)	(66.8)	(68.8)	(70.0)	(73.9)	(74.3)	(75.2)	(76.0)	(80.0)	(79.4)
うち10万羽以上～50万羽未満層(千羽)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	60,160
シェア(%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(43.8)
うち成鶏めす50万羽以上層(千羽)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	48,842
シェア(%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(35.6)
1戸当たり平均 飼養羽数(千羽)	46.9	48.2	50.2	52.2	55.2	57.9	63.2	66.9	74.8	75.9

資料：農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)

注：1) 種鶏のみの飼養者を除く。

2) 10万羽以上層戸数シェア及び羽数シェアは、学校、試験場等の非営利的な飼養者を除いた数値を用いて算出している。

3) 数値は成鶏めす羽数1,000羽未満の飼養者を除く数値。

4) 平成22年、平成27年及び令和2年は世界農業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

また、平成23年、平成28年及び令和3年の()内の数値は、それぞれ平成21年、平成26年及び平成31年との比較である。

5) 50万羽以上層については、令和3年以前はデータがない。